日本國民の文化的素質

内藤湖南

青空文庫

今日申します演題は「日本國民の文化的素質」斯う云ふ風な事を申上げることに致しましたのですが、私は此の問題は前から種々考へて居りますけれども、もう少し悠り考へを纏めようと思ひまして、今日迄何處でも之に就いて講演したこともありません。此の中の極一部分の事に就ては、多少言つたことはありますけれども、大體此の問題に就いては講演したことはありません、勿論まだ私の考へも十分はつきり纏まつて居ないのであります。又十分はつきりした詳しい材料の蒐集も出來て居りませんが、此の會が幸に杉浦先生の記念の會でありますから、兎に角斯う云ふ問題を、恐らく先生が生きて聽いて居られても、お叱りは蒙るまいと思ひまして、斯う云ふ問題の最初の講演を試みて見度いといふので、それで斯う云ふ題目に致しました。まだ十分考へを練つて居りませんから、定めし論旨にも支離滅裂の事があり、お聽き苦しい所もありませうし、御非難の點もあるかとも思ひますが、それは御遠慮なくお訊ねを願ひます。さうして私もだん〳〵之に關する考へを纏めて見度いと思ふのであります。

此の數年前から考へましたことは、凡そ國民の文化的の素質、即ち或る國民が文化を持つべき素質があるかどうかと云ふ事を考へるに就て、之を吟味する方法が先づ第一に考へらるべきであるといふことであります。今日でも世界に色々な國がありまして、各々相當な文化を持つて居りますが、然し其の根本から自分の國で自分の文化を發生して居る國民と、さうでないものとがあると思はれます。日本などは時として此の後の方の、文化を持たない國民の樣に誤解

される傾きがあるのであります。現に日本には支那の留學生が澤山來て居ります、支那の留學生は盛んに日本に來て研究した揚句、往々にして輕蔑した考へを持つて居ります。それは何かと申しますと、日本は今日大いに進歩した國のやうに自惚れて居るけれども、日本と云ふ國は元來維新前迄は、自分の國即ち支那の文化を取り入れたのではないか、さうして明治以後になつてから歐羅巴の文化、殊に最近に於ては獨逸の文化を丸呑みにして居るのではないか、何も自分の文化を持ち得ない國民で、少しもそんなに尊ぶには當らない、日本が非常に勢力が強くて盛んでも、若し之が亡びたら、後には何も殘らない國であるが、自分の國は大したもので自分の文化を持つて居る、自分等の持つて居る文化は、今日の進歩して居る國、古來進歩したどの國に比べても決して劣らないものを持つて居る、其の點で日本よりも遙かに自分等は優秀な國民だと云ふ事をいふ者が多くあるのであります。之は相當な理由のあることでありまして、日本の眞の歷史、つまり眞の文化の根本を知らずに日本の事を考へると、確に斯う云ふやうな考へになり得るのであります。然し私は左樣ではないと信じて居るのであります。が、然しさうでないと信じた所で、それを立證すべき確かな事がなくてはならぬと思ひます。

　無理に之を立證しようとして、我國は二千何百年經つて居ると云ふやうな、有りふれた、日本人が普通に自慢する樣な歷史を言つたのでは、さう云ふ支那人などの連中はなか〳〵承知しないのであります。さう云ふ事から私は先づ第一に、それでは世界に、文化を持ち得る國民と云ふものが、一體どう云ふ條件を備へて居るかと云ふ事を考へる必要があると思ひました。で、

先づ其の點から云へば近い所で支那であります。私は澤山の國民の歴史を知つて居る譯でもありませんが、先づ支那の如きは文化を持つて居る國民であります。それから印度、印度はやはり之も誤解され易い國でありまして、今でも印度人は未開な様に思ふ人などがありますけれども、やはり立派な文化を持つて居ると思ひます。それから今日種々の國民より成る歐羅巴の文化で、今日の傳統を爲して居るものはギリシヤ以來の文化でありますから、先づギリシヤ人の持つて居る文化と云ふ様なもの、又アラビヤ文化、ペルシヤ文化と云ふ様なものもありますけれども、私はまださう云ふ國々の事を十分考究致しません。先づ私にわかる範圍の國民の事を考へまして、さう云ふ國々が文化の條件として持つて居るものが、どう云ふものであるかと云ふ事を比べる必要がある、所が夫等の國民は不思議にもやはり同じ様なものを持つて居ります。之は偶然ではないのでありませう。つまり文化國民と云ふものは、さう云ふものを必ず備ふべき必然の理由があるものと思はれます。それはどう云ふ事かと申しますと、支那には丁度今から千九百年前に、其の當時迄あつた所の、凡ゆる書物の目録を書いたものがあります。其の大部分の書物は今日失くなつて居りますけれども、之からつまり今日の支那の文化と云ふものは傳統を引いて來て居るのであります。兎に角支那では前漢の末頃に、非常に立派な目録學者がありました、目録と云ふと古來の書物の名前を帳面に記する丈かの様に考へられますが、支那の當時の目録學と云ふものは、本の内容に依つて分類し、批評する所の一種の學問であります、其の學問を支那で其の當時考へた人があります。即ち有ゆる學問の總論を目録に依つてやる事

を考へた人があります、私は其の人の學問を大變尊敬して居ります、それが有名な劉向、劉歆の父子であります。此の人達が當時有ゆる本を見まして、さうしてそれを一括して批評したものがあります。即ち前漢書の藝文志の中にこの劉向、劉歆の父子の學問の大略が殘つて居りますが、此時の目録には書籍を六種に分類して居ります。それは六藝、諸子、詩賦、兵書、數術、方技、斯う云ふ六種であります。六藝と申しますのは經書でありまして、其外を五種に分類して居りまして、それに又各々此の中が幾つかの細い部となりまして、それに依つて一々評論したのであります。支那人は兎に角當時之だけのものを持つて居た、今から殆ど二千年前に之だけのものを持つて居たので、之は支那人が今から二千年前に立派な文化を持つて居た一つの證據であります。

印度人はどう云ふものであつたかと申しますと、最初今の佛教などの興る前に、四吠陀と云ふものがあつたと云ふことであります。今でも其本はあるのであります、其の本は多くは宗教的に出來て居ります。支那の劉向、劉歆父子の時には宗教的ではなかつたのでありますが、印度の四吠陀は組織が全く宗教的に出來て居て、其の四つの内の半分通りは大體宗教に關したものでありますが、其の内の一つはやはり兵事、支那で云ふ兵書と同じ樣に兵事に關したものでありまして、其の他の一つが六藝と同じ樣な性質を帶ぶるものでありました。之は實は支那の前漢時代に比べまして、年代も古いし、それから記録もまだ十分に備つて居なかつた時でありまして、其の後に於きまして印度では、丁度やはり支那の劉向、劉歆の時代と同じ程度位の色

々の學問が開けて來て、其の書籍も出來て來ました。印度では支那よりも本を用ひたのはむしろ餘程後でありまして、其の前には學問を口で傳へて居たのでありますが、丁度支那の秦漢以前の様な状態を以つて傳へて來たのであります。ともかく佛教の興りました頃に五通りの分類の様なものが學問の上に出來ました。印度で之を五明と申しますが、聲明、因明、醫方明、内明、工巧明、斯う云ふ五種類であります。之が其の分類の仕方がぴつたりと支那とうまく合ふ譯には行きませんが、大體に於てよく合ふのであります。支那では方技、之が醫方明に當ります。工巧明が數術に當るのであります。内明が印度で哲學の様なもので、大體に於て諸子、六藝に當ると思ひます。聲明は聲の方の學問でありますが、この聲の方の學問と云ふのは、印度では聲を大變に神聖なものと考へたから、斯う云ふものが出來て居りまして、之に音學的な分子が含まれ、文法の様なものも含まれて居るのであります。其の後因明と云ふものが出來ました、これが論理であります。大體に於て兵書の部分を除けば印度の學問も支那の學問もやはり五つに分れて居て、分類の間には、多少食ひ違ひがありますけれども、然し内容として持つて居るものは、全般から觀れば殆ど同じものである。支那の兵書の部分は印度では古い吠陀の方にあるのであります。斯う云ふものがつまり印度の文化の要素として考へられたものと思ひます。

西洋の事は私詳しく知りませんけれども、或る時代から希臘のアリストテレスの考へが、近代迄永く續いて、ルネサンスの時代迄此の考へで學問の組立が出來て居りました。日本でもキ

リシタンが初めて渡つて來ました頃、支那の明の末に利瑪竇（マテオ、リツチ）と云ふお坊さんが西洋から來て、天主教を弘めましたが、其の當時に西洋から來た艾儒略といふ宣教師が支那で、西洋の學問全體に關する西學凡と云ふ册子を書いて支那人に見せたものであります。其本は日本では德川時代は禁書となつて居りました。當時は東洋人が西洋の學問の大體を知るには西學凡に依つて知つたのであります。之が十七世紀の初頭に支那で出來たのであります。つまり西洋の學問と云ふものは、アリストテレスの時に古代文化の總括が出來て、其の後に來たキリスト教の文明が混和して、一つの學問の大系を成したのでありますが、其の大要を最も早く東洋に知らしたのが其の西學凡であつて、之に載つて居る所に依ると學問を六科に分けて居ります、之に依つて全體の學問を觀ることが出來るのであります。支那字で書いてありますが、一つは文科（勒鐸理加）、それから理科（斐録所費亞）、醫科（默弟濟納）、法科（勒義斯）、教科（加諾搦斯）、道科（※祿日亞）、斯う云ふものであります。先づ文科、理科の二つから這入つて、それが第一歩の基礎學問であつて、其の後それが濟むと醫科をやるか、法科をやるか、教科をやるか、道科をやるか其の四つの中の一つを專修するとしてあります、之が西學凡の大意であります。其の内主に理科の所に於てアリストテレスの學問を大體に於て論じて居るのでありますが、然し文科と云ふのもやはりアリストテレスから來た所のものであると思はれます。文科はどう云ふものをやるかと云ふと、古賢の名訓、各國の歷史、各種の詩文、それから自分で文章をかき又議論をする事、之が即ち文法學、修辭學、さう云ふものであります。其

の次に理科は大體に於てアリストテレスの時代の學問から來たので、最初にロジカ（落日加）を稽古する、其の次はフイジカ（費西加）を稽古する、其の次にはメタフイジカ（默達費西加）、それからマテマチカ（馬得馬第加）を稽古する。それから其の後はエテカ（厄第加）を稽古する、それが即ちアリストテレスの學問の大意だと云ふことを云つて居ります。それだけが準備の學科で、それから後はつまり專門になるのであります。專門は醫科と法科と教科、この教科がキリスト教時代の學問であつて、羅馬教皇が定めた教中の法度で、今日の日本の大學等に、さう云ふものはありやう筈がありません。道科、之は今日日本では神學と稱して居るものであります。で、つまり此の中で最後の二つ、教科、道科と云ふものは、之はキリスト教が歐羅巴に入つてから後に、其の關係から出來た所の學問でありますが、前の四つは希臘以來歐羅巴で文化を有つて居る所の國民が、皆有つべき要素として有つて居た所の學問であります。微細な點に渉つて考へると、異つた種々の部分があるでありませうけれども、兎に角理科の中に含む所の落日加、費西加、默達費西加、馬得馬第加、厄第加、斯う云ふものを必修の科程としてやつたと云ふことは、大體に於て支那や印度の學問の分類と自然に一致すると思ひます。さうして見ると、何處の國民でも文化を有つ國民が有つて居る所の學問の大系は、大體同じものと云ふことが出來ます。

そこで日本がさういふ文化に必要な學問を有ち得しや否やと云ふことを詮索するにはいかにすれば可いか、日本の様に外國の文化を始終受けて居た國民は、之を詮索するのは餘程困難で

あります。日本は聖徳太子以後、平安朝の頃迄、支那の文化を丸呑みにして居た時の學問と云ふものは、恰も唐の代の學問でありまして、其の時代に於て之だけの條件が皆備つて居ても、それは支那の文化を丸寫しにした條件が備つて居るのであります。日本國民はそれを傳へて理解したと云ふだけであつて、本來それを有ち得べき素質があるかと云ふことは斷言し難いと思ひます。それから最近徳川時代になつて又支那文化の再輸入が殆ど三百年間續きました。其時に日本人が如何なる立派な學問をしてゐても、やはり支那の學問の殆ど皆鵜呑みであつて、日本國民でなくても眞似をし得る國民なら出來る事でありますから、それでは文化を有ち得る國民と云ふ證明にはなりません。それでありますから外國の學問を丸寫しにした時代では吟味が出來難い。そこで私は日本が昔の奈良朝、平安朝時代の支那人から受取つた所の文化を殆ど皆失つて、さうしてまだ徳川時代の支那文化の再輸入して來なかつた時代、日本が非常に戰亂に荒らされて暗黒の時代となつてゐた足利時代、特に應仁、文明以後に於て之を調べる必要があると思ひます。勿論さう云ふ暗黒時代は折角支那から輸入した多くのものを失つて居ります、其の當時の貴族の學者、例へば一條禪閤兼良と云ふ様な學者がありますが、さう云ふ人達は戰亂の爲めに古來相傳の文化を失つたと云ふ事を非常に殘念がつて居る。勿論當時古來相傳の文化を失つた事は悲しむべき事であつたに違ひありませんが、さう云ふ様に人から借着をして居た着物を皆脱いでしまふと云ふ時には、丸裸の姿を見るに極く好い時代であります。其の時代は日本が文化的素質を有つて居るかどうかと云ふことを見、さうして又それを吟味するに都合

の好い時であります。

然しそれを吟味するには一寸一通りの吟味の仕方では難しいのでありまして、色々な考へ様をしなければならない。私はやはり支那の事を考へる様に目録學の方から考へて見度いと思ひました。其頃の日本の目録としては本朝書籍目録と云ふのがありまして、之は仁和寺書籍目録とも申します。之は仁和寺にあつたものを寫したからさう申すのであります。傳へらるゝ所に依りますれば、其の作者は清原業忠と云ふことになつて居ります。之は足利將軍義教の時の人でありますが、足利の世は此義教の時から不安定になりかけたのであります。此の人が赤松滿祐と云ふ家臣に殺されてから、世の中が亂れかゝつたのでありますが、此の義教の注文で書いた目録だと云ふことになつて居ります。之は其の當時の目録を全部書いて居る譯ではありませんけれども、之に載つて居る目録の分類の仕方を見ると云ふと、大體此の當時に必要な書籍の程度が判ります。此の目録は神事、帝紀、公事、政要、氏族、地理、類聚、字類、詩家、雜抄、和歌、和漢、管弦、醫書、陰陽、傳記、官位、雜々、雜抄に分類されて居ります。其中神事、帝紀、氏族、地理、和歌は日本固有のもので、公事、雜抄、管弦、雜々の中にも幾分固有のものがあります。之が前に申しました應仁の亂の前に當りますので、將に日本は支那から來た文化の着物を脱ぎかゝつて居りますけれども、まだ皆脱ぎ切つて居ない時であります。それでありますから、此の中には日本人が丸裸になつてから發見した所の文化的要素のみを見はしては居りません。之は一面には支那文化の傳來と、それから日本の古代から傳つて來た所の宗教上

の儀式とか、色々な種類のものを其の中に有つて居りますが、文化國民が有ち得べき要素を、裸になつてから見出したと云ふ其の證據は、此の目録に依つて見ることはできません。然し足利の亂世に於ても日本人がその古來相傳して來た所の文化をどれ程大事にして居つたかゞ判るのであります。さうして此の目録以後に新しく出來たものゝ中に文化的要素があれば、それが眞の日本人が素ツ裸になつてから發見した所の文化であります。それがあるかどうかと云ふことでありますが、それが今日から考へると貧弱なものでありますけれども、有ることはあるのであります。其の有ると云ふ點が、甚だ我々にとつて心強いのであります。

どう云ふ事かと申しますと、其の後、應仁、文明以後の亂世で、御承知の如く皇室は非常に衰微あそばされたのであります。數年前東山御文庫を整理される時に、私も取調員の一員を汚しましたが、御文庫に後奈良天皇の宸翰で、天文十四年八月二十八日の宣命案がありました、それは伊勢の大神宮に即位後二十年大嘗會を行はせたまふことも出來ないと云ふことを謝せられた宣命であります。今の天皇陛下が皇太子であらせられた時に之を御覽になりました。それ程極端に困つて居られても、支那から傳來した文化の或るものを、どうしても手離されなかつたものがありますが、さう云ふものは例へば借着であつても、之れ一枚脱いだら凍えて死ぬからと云ふので手離さないものは、自分の作つたものと同樣に値打があると思ひます。さういふものがあります。それから又其の他に本當に寒くて叶はないからと云うて、自分で拵へて着る着物がある、それが自分の本當の着物であります。それらがつまり日本人が暗黒の時代でも離

さなかつた并びに生み出した所の文化であります。

其の時にどうしてもさうなつて來ると、文化の中心になるのは帝室であります。帝室ではどう云ふものをどうしても離さずに持つて居られたかと云ふに、一つは歌道の傳授であります。古今集の傳授とか、伊勢物語とか云ふ様なもの丶傳授で、それから同じく必要なものは書道の傳授、音樂の傳授、之は神樂などの如く日本で出來た音樂もありますが、支那から傳來したものもあります。兎も角も斯う云ふものは、帝室が非常に困窮して居られる時でも御父子代々で御傳授になつて決して失はなかつたのであります。この歌道の傳授は應仁、文明の戰亂によつて、殆ど絶えんとしましたが、後土御門天皇はその祕説を傳へて居つた關東の武士、東常縁を京都に召されて、歌道を再興せしめられました、又書道の傳授、音樂の傳授などは皆帝室が基であります證據は、御文庫の中に澤山に殘つて居るのであります。さうして其傳授の至つて尊いことは、世の中に如何なる歌道なり書道なりに堪能な人がありましても、其の傳授の根本は皇室でなければ權威がなかつたので、傳授の中心は皇室にありました。一例を申しますと德川時代に於きまして近衞家熙と云ふ人は書の名人で、東山、中御門御二代の天子に御手本を上げられました程でありますが、さう云ふ名人であつても、やはり其の傳授は皇室から受けて居る。さう致しますと云ふと、其の時の皇室は政治上の權力はないけれども、文化の上の權威だけは最後迄離さなかつたのであります。どんなに御衰頽の時でも、それだけは御父子で御相傳をなされ、それが門跡、公卿などに授けられ、始めて世の中に其の道の權威と云ふものが出來たの

でありまして、皇室は最後迄文化の權威は握つて居られたのであります。其の他の事は其の學科の種類に依つて、皆公家達の家々に權限を任せて居ります。勿論それは皇室の配下である處から代々持ち來つた家業であります。例へば暦法、陰陽に安倍家とか加茂家とか云ふものがあり、それが代々持つて居たのでありまして、其の家が其の學問を代々傳へて、さうして其の學問は其の家から傳授を受けなければ正しいものと云ふことにはならなかつたのであります。

それから又丸裸の日本が文化の向上に、非常なる力を有つて居りましたのは、やはり神道の傳授です。此の時分の神道は、後の本居、平田といふ様な人達の時から見れば、俗神道といはれて居るものでありましたが、然し其の當時の文化の上に於て必要な程度の解釋はせられるだけのものを有つて居ります。それは先程申しました耶蘇教の方でも、教會法等は羅馬法王が人間の魂を預つて居る、其の爲めに出來た教會の法律でありまして、此の法律を拒む者は、當時の國王でも何でも破門せられたのでありますが、どうもそれが間違つて居ると云ふので、西洋でも新教が出來ましたが、當時は其の教會法の下に服從しなければ正確な信仰といはれない。それと同じ様に日本に於ても、兩部神道やら、唯一神道やらが如何に間違つてゐたかどうか知りませんけれども、兎に角其家の傳授を受けなければ正しいものとして承認されなかつたと云ふことは事實であります。それで神道は其の時分佛教の意味に於て解釋して、非常に考へ方が間違つてゐたと云ふ事は、徳川末期に神道を研究した人達の議論であります。これには種々の解釋の仕様がありませうけれども、其の當時に於いては、佛教が日本に於ける最上の哲學であ

りましたから、最上の哲學に依つて神道を解釋したのであります。徳川時代の初から神道を儒教で解釋した人もあります。それから國學で解釋する人もありましたが、足利時代に於て佛教に依つて解釋すると云ふことは、つまり佛教が思想上の最上の權威であつたからであります。さう云ふことで暗黒時代の神道と云ふものは、殆ど完成してそれを握つて居たのが吉田家でありまして、それを日本中の神主に傳授した、此の傳授を受けなければ神道の權威がなかつたのであります。それで之は特に當時に於いて發明された所の一つの學科であります。つまり日本の古事記とか、日本紀とか云ふものは奈良朝時代からありまして、祖先の編成された歴史と考へられて居つたのでありますが、平安朝頃までは、其の神代の記事に哲學的の意味をつける事はなかつたのであります。所が鎌倉の末期から足利時代に於て出來た神道は、特に日本紀の神代巻を佛教で解釋致しましたが、こゝで神道に哲學的意味をつける様になつた。そこで日本は初めて自分の國の歴史を出發點とした哲學を有ち得ることになりました。

また和歌の方でありますが、和歌は即ち第一に國語の上に立脚致します所の文學であります。何れの國でも根本は其の國の國語が權威を持つのが文化の要素であります。國民が自分の國の言語の法則を神聖なものと考へることが、之が國民の有つ文化の第一の要素でありますから、何處の國でもあります。日本では國語の文法上、之も後になつて、新しい國學者、賀茂眞淵、本居宣長と云ふ人達から考へれば、それは間違つた文法であつたに違ひありませんが、兎も角も日本に國語の文法があり、又用語の制限があつて、其の制限に反すれば歌にならないと云ふ

ことは鎌倉時代からあつたのであります。それが暗黒時代を經て、一つの文化的權威になつて、歌は二條家とか冷泉家と云ふ所から傳授を受けなければ歌が詠めないことになつたのであります。

又此の時代に於て最も貴ばれた本に源氏物語、伊勢物語があります。源氏物語は男女の關係を露骨に書いたもので、今日から見れば之を講讀することは危險の様に思はれるものを、そんなに尊崇したと云ふことは不思議な様に思はれますけれども、そこに日本人が支那の道徳でもなく、印度の道徳でもない或る要求を滿たしたものがあるからであります。殊に支那の道徳とは實にかけ離れた考へ方をして居る、伊勢物語にしても、男女の關係のだらしのない所を書いて居りますが、其の間に日本國民の僞らざる人情を書いてあると云ふ事を、日本人が尊びました。戰國の末から豐臣太閤の頃に亙つて、歌學で有名な細川幽齋に其の門下の宮本孝庸といふ者が世間の便りになる書は何が第一かと聞いた所が、それは源氏物語だと、それから又歌學の博學に第一のものはと問うた所が、それも源氏物語だと云つたと云ふことがありますが、それは表面男女關係のだらしのない小説の中に含んで居る深い意義を日本人が發見する様になつて、それを一種の日本文化と考へたのであります。之は今日から見れば色々な考へ様をしなければならない點もありませうが、然し其の間に支那でもなく、印度でもなく、つまり日本人の僞らざる性質、正直な性質を發見したのであらうと思ひます。それが後になつてから、賀茂眞淵、本居宣長と云ふ人達が支那の學問に反對して一種の自分の國の特別な性質、日本人の本當の尊

い性質と云ふものを鼓吹する様になつたのも、さう云ふ事から流れを引いて居ると思ふのであります。然し世態の變遷もあり、今日では其の時分の思想を丸寫しにして、其の儘に應用も出來ない様な點がありますが、兎に角從來の支那文化の外に、日本特有の文化の要素を有つてゐることをあらはしたのであります。それは丁度其の以前の南北朝時分に北畠親房の神皇正統記の中に、日本は神の國で支那よりも印度よりも、萬世一系の皇室を戴いて居ると云ふ事が大變尊いと云ふことを云つたのと問題は異ひますけれども、同じく日本の國情の中に特別な發見をした點があるのであります。斯う云ふことは、寧ろ日本が支那文化の衣を脱いで、自分が丸裸になつてから得た所のものでありまして、日本人は正直を尊び、ありのまゝなる姿を尊ぶことを特色とするやうになつたのでありますが、それが皆此の暗黒時代に他の國との關係を大部分失つた時分に出來て居ります。それがつまり日本人の一種の性質でもあり、一種の又文化の特質でもあります。之が日本人が自分で造り出した所の文化の素質です。

日本の國語の法を發見する事、日本人の性質としての特別な點を發見する事、國體の特別な點を發見する事、さう云ふ事は鎌倉時代から足利時代の暗黒時代にかけて發見した事であります。それはやはり何處の國民でも皆文化ある國民は有たなければならない所の條件であります。さうして其の外に支那から傳へられて來た文化で、どうしても失つてならないものは、皇室なり公家なりが文化の權威として、非常な難儀をしながらも傳へて居るのであります。一條兼良などは應仁の戰亂の爲に其の邸宅は何れ燒けると覺悟して、澤山の本を文庫にしまつて避難し

たのでありますが、果して兵火の爲に第宅は燒けて、文庫は殘りましたが、兵士等は庫に何か金帛などがあるだらうと思つて、庫から本を出して箱や何かを叩き壞して、火を付けて燒いたと云ふので、聲をあげて哭いたといふことであります、さういふことで書籍の保存なども出來なかつた事を悲んで居ります。又其の當時樂の家で笙の祕曲を傳へて居た豐原統秋の書いた體源抄には、戰亂の間に其父と叡山に避難して傳授を受けたが、將來其傳を失つては不孝になるからとて此書を書いたことを述べて居ります。さういふ樣に其の當時朝に夕をはからざる危難の間に、文化階級の人として、さう云ふものをどうしても失つてはならないと云ふ考へで、皇室なり公家なり、諸職の人々が一所懸命になつて暗黑時代にも保存して、それだけは日本がどんなに亂れても失はなかつたものであります。さうして殘した所のこの文化は、初めはたとへ支那から來たものであつても、支那人でも日本人の樣に懸命になつて殘した歷史はないのでありますから、それに比べると日本人が其の文化を命懸けで殘した事は、之は自分の文化と云つても宜しいと思ひます。支那から借りて着た着物でも、支那人が丸裸になる時に、日本人は其の一枚だけは兎に角脫がなかつたと云ふことは、それは日本人の物と云つて差支へないのであります。

さう云ふことで其の當時、日本人が保存し、或は新しく造つたものをだん〳〵調べて見ますと、其神道、歌道、物語の傳授とか書道の傳授と云ふものは、即ち我邦の哲學でもあり文學でもある、即ち文科理科、西洋でアリストテレス以來傳來して來た所のものと同性質の者を含ん

で居るのであります。それから暦法、陰陽と云ふ様なものは、支那人が傳へて居た數術、或は印度で云へば吠陀の中にあるもので、之も同じく日本人が暗黒時代に保存して居たのであります。但し以上の如き京都の文化と云ふものは、さう云ふ様に皇室が非常に衰微した時代に傳へられたのでありますからして、兵科に關するものはなかつたのであります。昔有名な八幡太郎義家は兵法を知らないと云ふので、大江匡房に就いて兵法を稽古したと云ふことがありますから、其の時分には兵法も公家が權威を有つてゐたのでありますが、足利の亂世には、この支那から傳來した兵法は多く失つたのですけれども、地方の武家が又學者達を聘んで、兵法の書を講じさせて聽くと云ふ所から多少は殘つた點もあります。それが後になつて日本では天文、永祿から元龜、天正の頃になりますと、武家が各々自分の兵法を發明して、武田家は武田流、北條家は北條流と云ふのが出來ましたが、之も實は武田信玄の存生中に武田流が出來、北條氏康の時に北條流があつたのではなく、多くは其の家が亡びてから何々流と云ふのが世の中に現れて、一種の兵法學者の看板で飯を食ふ人間が出來たのであります。しかし兎に角其の頃には支那傳來のものゝ上に、日本人は特別な兵法を考へたのでありまして、殊に日本人は兵法と云ふ語を武術の意味に用ゐることになつて、それが得意であつて、大變な流行でありましたが、不思議なことにはそれが逆輸入でもありませんが、日本の武術は倭寇の爲めに支那に傳はり、支那人の當時の著述（武備志の如き）に日本の武術の型やら説明やらを載せるやうになつたのであります。これは倭寇が支那へ押入る時に、その擊劍が支那人を驚かしたので、支那人が日本

武術に注意する様になりました、これは從來永い間日本に支那文化を輸入したが、逆に日本の文化を支那に輸出した所の最初のものであると思ひます。其の外に又鐵砲があります、鐵砲は天文十一年かに葡萄牙人が種子島にもつて來たと云ひますが、日本で一種特別な狙撃の法が發達致しまして、其の狙撃の法は、朝鮮役の時大いに支那人を惱ましました。尤も石火矢や大砲は支那の方が日本人よりも進んで居りましたが、此の小銃で狙撃するのは日本人特有のものでありまして、朝鮮で七八年も永い間戰爭して居る間に、朝鮮人が日本人から傳授されまして、それが後になつて支那人に大變調法がられた事があります。それは清朝の康熙年間、今から二百餘年前に露西亞の有名なペトル大帝の時にシベリヤの、ネルチンスク、アルバジンと云ふ所で、支那の兵隊と衝突した、其の時に朝鮮人が鐵砲を擊つ事が上手だと云ふので、朝鮮人から銃手を呼び出して戰爭させて居ります。それは即ち日本人が鐵砲に就いて特別な發達をしたものが朝鮮に傳はり、それが西洋人と戰爭する様になつた不思議な因緣であります。それは最初西洋から渡つた武術でありますけれども、日本人が一種の利用法で日本式な小銃の術をやつたのであります。それで京都で握つて居る文化の中には、兵科に關したものはありませんが、それは日本中一般に流布して居つたのであります。

さう云ふ事で、兎に角印度なり支那なり西洋なりに於て文化の要素として數へられて居た條件は、日本の暗黑時代に有ゆる外國から輸入された文化の着物を脱いだ後に、新たに發明され、或は保存されて存して居たのでありますから、日本人は文化的要素を持ち得る條件を備へて居

ると云ふ事は申す迄もないのであります。之が即ち日本國民は文化を有し得る國民と云ふ證據にならうと考へられるのであります。

もう少し之は吟味して、材料も十分にして發表すべきでありますけれども、兎に角之に就いて最初の意見の發表を此處でやらせて頂かうと思つて申上げたのであります。

（「日本及日本人」第百八十三號及第百八十四號、昭和四年八月十五日及九月一日發行）

青空文庫情報

底本：「内藤湖南全集　第九巻」筑摩書房
　1969（昭和44）年4月10日初版第1刷発行
　1976（昭和51）年10月10日初版第3刷発行
底本の親本：「増訂日本文化史研究」弘文堂
　1930（昭和5）年11月
初出：「日本及日本人　第百八十三號、第百八十四號」
　1929（昭和4）年8月15日、9月1日
入力：はまなかひとし
校正：菅野朋子
2001年12月12日公開
2016年4月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本國民の文化的素質

内藤湖南

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/